



# 悪夢からの躍動

## with コロナ



上海日本人学校虹橋校 田上 達人

### 「コロナ禍の悪夢」

春節最初の土曜日が悪夢の始まりだった。緊急招集された管理職ミーティングでの校長の言葉が重く申し掛かった。

「当局から全学校に休校の指示が出た。職員の入校が禁止された」

かねてから武漢に端を発したウイルスが広がり、上海でも閉店が目立ち、往来が少なくなってきた時だった。

1200名の児童を抱える虹橋校の保護者から殺到するメールに返信しながら、保護者への通知、休校中の学習保障、開校後の保健対策、置いてある荷物の渡し方など様々な案件について議論して方向性を共有し、分担を決めて企画を練り、状況が変わって白紙に戻り、また思案するという堂々巡りを繰り返していた。

そんな中、東京の倍の人口を抱える魔都・上海は魔物に憑かれたようにゴースタウンと化していた。コロナに感染した人はマンションの部屋だけでなく、電話番号から勤務先まで公表され、次々に携帯に情報がアップされ、忍び寄る恐怖を感じていた。近くに感染者が出ると、入り口に外から紙が貼られるかセンサーが取り付けられ、外出が分かると強制退居となる徹底ぶりだった。道端に遺体があるという情報が飛び交う中、公共交通機関を使わずに毎日歩いて通勤したことも悪夢のようだった。すれ違う時は互いに距離をとり、エレベーターで誰かと一緒になると目を瞑って感染を避けようとした。



### 「デジタル化における躍動」

スマホがあれば財布がいらぬ中国にある本校では、1人に1台のiPadを貸与して、授業でも家庭学習でも有効利用している。事の発端はまたしても休校指示だった。6月中旬にようやく開校した本校に、現地校が休みになる7・8月は児童の校舎への立ち入りを禁じる指示が出された。そこでかねてから構想していた1人1台iPadが、文科省や上海商工クラブの支援を得て瞬く間に実現した。これからは見据えた準備をしてきたこともあり、教員の戸惑いも見られず、様々な工夫を凝らしながら、夏の間をDingtalkというアプリを使ったりリアルタイム授業で乗り切った。9月以降の対面授業になっても様々な場面で活用し、よさを共有しながら意欲的に学び合う姿がある。iPadによって全ての通信を保護者にPDFで渡し、会議資料のペーパーレスも進めて無駄を省き、時間も生み出した。子ども達もアプリを使いこなして思考の整理や表現、共有をしたり、検索・記録・撮影・編集・視聴などを自在にこなしたりして、学習効果と自発性を高めている。

10月の国慶節明けから、4月に赴任予定だった職員も加わり、学校全体がさらに躍動していけよう。

